

## 第 30 回例会

2023. 4. 5

例会場 クラークリアンテナサンパレス 福島市上町 4-30 開催日 毎週水曜日 12 時 30 分

WEBSITE!



会長 渡邊 正義

幹事 穴戸 隆司

国際ロータリー第 2530 地区 県北第一分区  
福島南ロータリークラブ会報今年度  
スローガン  
インスパイア

いつもわが身を鼓舞し、仲間の行動を激励し、人に感銘を与える

会員 66 名中 50 名出席 出席率 75. 76%  
修正 57 名出席 出席率 86. 36%  
メイクアップ 7 名イマジン  
ロータリー

## 会長挨拶

## 渡邊 正義 会長

最初に国分さんお帰りなさい。7 ヶ月という長い療養生活を終えて元気な姿を見せて頂き、よかったですね。

先週は福島南 RC 創立 52 年記念式典、そしてセブ RC 歓迎夜間例会という事で、会員の皆様には遅くまでお疲れ様でした。また、お手伝い頂いた各委員会の方お疲れ様でした。開会まではどうなる事かと一抹の不安もあったのですが、到着の遅れが 15 分程度だったため、何とか無事終わりました。皆様には本当に感謝しかございません。セブの方々皆様フレンドリーで愉快な方々ばかりでした。私のテーブルには日本語が話せる御田さんがいらっしゃいましたので、通訳もしていただきながら皆さまとお話できました。御田さんは 20 年もセブに住んでいるということで、中学生の可愛らしい娘さんも同行して参加頂きました。

今週は、明後日県北第一地区のクラブ会長幹事会があります。それに先駆けて「サンパレスの廃業に伴う対応」について、箭内ガバナー補佐を座長として情報交換しながら対策を協議する予定です。先日の新聞報道によりますと、買い取り先が決まったという事ですが、譲渡は来年 4 月だそうです。4 月以降の情報は何も無く、仮に今までのような形式で続けるにしても耐震補強等でかなりお金がかかるのではないかと推察され、どうなるかわからない状況です。

福島 RC はいち早くエルティとある程度、話がついたとお聞きしました。福島南 RC でも私と穴戸幹事、鈴木 SAA 委員長の 3 人で色々検討しているところです。色々なところにお話しをお聞きしておりますが、1 番ネックになっているのは「毎週定期的を使用すること」でありまして、各会場も飛び入りでいろいろな行事が入ってくるため、エルティやグリーンパレスには断られました。ただし、青少年会館については、先週 3 人で訪問したところ、現時点では空いているとのこと。

各クラブが集まって協議しても、それぞれに事情があり、なかなかこういうことについて、意見をまとめるのは難しいと思います。私の会長年度はどうかかなるかもしれませんが、菅野会長、赤間会長の年度が大変になるかと思えます。現在、利便性の良いところとは思っておりますが、とりあえず、まず会議ができるところを一生懸命探しております。皆様のお知恵もお借りして情報を早く取りたいと思いますので、宜しく御協力願います。



まずは身近なロータリアンの投稿についてご紹介いたします。縦組みの13頁になります。福島RCの横山淳さんが「私の一冊」というコーナーに投稿されています。新版、伊勢物語という私にはあまりよく分からない本ですので特にコメントすることはできませんが、ご興味のある方は是非お読みいただければと思います。

今回は横組みの方で「戦時下の日常」というウクライナレポートが特集されています。そして、それに付随する形で縦組みの16～17頁に「ウクライナ支援はロータリー財団をとおして」という記事が掲載されていますので、今日はこれを中心に学んでいきたいと思えます。

ちょうど私たちのクラブでもトルコに対して支援金を送ることになりました。

「支援はロータリー財団をとおして」という、この呼びかけと違って寄贈先はトルコ大使館を予定しておりますが、これにはそれなりの目的があって理事会で決定されましたので、それはそれとして、これからご紹介いたします記事からロータリー財団の基金・支援の素晴らしさについて改めて学んでいきたいと思えます。

ロータリーに限らず、ですけれども、何か義援金のようなものを送ろうとした場合に疑問に思うことがあるかと思えます。それは「本当に被災地に届くのだろうか」ということ、そして「それが被災地のため何に使われたのだろうか」という、この2つの疑問です。

「ロータリー災害救援基金」をこれに照らしてみた場合に一つの疑問「被災地へ本当に届くのか」ということに関してですが、実のところこれまでの「ロータリー災害救援基金」ではその点あまり明確ではなかったようです。どういうことかと言いますと、確かにどこかの被災地には送られてはいるものの、どの被災地に使われたのかは全てロータリー財団の判断に委ねられていたからです。私たちがあそこの被災地に使っていただきたいと願ったとしても、必ずしもそれが願い通りに実行されたわけではなかったということです。

ところが、昨年のロシアによるウクライナ侵攻を契機に変化が生まれました。昨年3月3日～4月30日までに寄せられた「ロータリー災害救援基金」については全てをウクライナ難民への支援に充てると発表があったわけです。当クラブからもこの時期に50万円を送らせていただいておりますので、ウクライナ難民の支援に役立てられたのだと思えます。さらにロータリー財団は、支援先を明確にした新たな基金を創設致しました。現在は「ウクライナ救援基金」、「パキスタン洪水救援基金」、「トルコ・シリア災害救援基金」の3つが創設されておりまして、私たちが支援したい先を選択できるようになりました。これは大変分かりやすく大きな進歩だと思います。

ここでウクライナ支援に関する記事の内容をご紹介したいと思います。17頁の「スピード感ある窓口に利点」では、第2750地区ロータリー財団委員長の田中靖さんが「紛争や災害時、私たちロータリアンは何ができるか考えます。現地とつながりがあるクラブは直接連絡を取り、現実的な行動を起こせますが、大部分のクラブはそうではありません。」とおっしゃられています。確かにそうなのですが、現実には現地とつながりがあったとしても直接支援することは難しいようです。そ



これは16頁の「補助金を活用する」の記事からも分かります。第2630地区ロータリー財団部門委員長の堀部哲夫さんが「現地では食料や医薬品が不足し、義援金を求めていることを知りました。その後、ウクライナ支援のために地区で即決し現金を送ろうとしましたが、銀行に送金を断られました。」とありますように、マネーロンダリングの規制が非常に厳しくなっておりますので、私たちが直接支援しようとしても、それは非常にハードルが高いということです。これらのことから義援金を送ろうとした場合には、「やはりロータリー財団の基金窓口を利用するのが最も現実的」ということになります。なによりロータリーの名の基に集められた義援金なのであれば、通常はロータリー財団の基金へ送るということが自然の流れであって、あるべき姿と言えるのかもしれませんが。

この第2630地区では地区財団活動資金から10万ドルと地区内クラブからの義援金7万5千ドルを基金の窓口を使って寄付をすることができたということです。そして、この記事には続きがありまして、ロータリーらしいロータリーならではの支援がありました。基金に集められた資金は災害救援補助金として地区ごとに活用することが可能だということです。1地区当たり25,000ドル(日本円で330万円)まで補助金を申請でき、一つのプログラムに対し多くの地区が合同で申請することも可能です。この第2630地区では全国の地区にも参加するように呼びかけて、16の地区が合同で補助金を申請し、大規模な簡易住宅建設事業を遂行することができた、ということです。

17頁の「ロータリーの醍醐味を得た」でも同じような事例が紹介されています。第2820地区の新井和雄直前ガバナーによりますと、同地区ではこの補助金を活用してムシユン村に日本初の仮設住宅を設置することができたということです。何に活用されたかが明確になったことで、会員から「入会して初めて会員であることを誇りに思った」ですとか「これがロータリーの醍醐味だ、よくやった、涙が出た」という感想をいただいたということです。

ロータリー財団補助金を活用すれば2つ目の疑問である「何に使われるのか」という点も非常にクリアになります。ロータリー財団の基金は私たちロータリアンにとって、寄付としてその資金を提供する奉仕と、基金に集められた資金を補助金として活用し被災地を直接支援する奉仕が可能です。入るところと出るところで私たちは関わることができるということです。このようなことはロータリーならではのことでないかと思えますし、先ほども出てきましたが、これこそ「ロータリーの醍醐味」ではないかと思えます。

ここでもう一度ウクライナ支援について考えてみたいと思います。ウクライナで起きていることは災害ではありません。従って基金の名称も「ウクライナ救援基金」となっています。昨年2月から戦争状態が続いておりますので、他の災害と違って一度支援したら済む、というものとは明らかに違うように思います。横組みの8頁～15頁に掲載されている「戦時下の日常」というウクライナレポートのなかで、ウクライナのロータリアンが最後のページでおっしゃっている言葉が気になりました。「ロータリーのネットワークのおかげで、アクセスが困難な最前線の町や都市に物資を送ることができました。来週には、ドイツのクラブから、3回目の医薬品が届く予定です」そして「ロータリーからの継続的な支援が必要です」と付け加えています。

同じヨーロッパとは言えドイツのクラブが何度も支援を行っているということ。そして私たちと同じロータリアンがロータリーに助けを求めているという事実は重く受け止めなければならないと思えます。

正直に申し上げまして私自身も一度支援金は送っておりますし、「ウクライナ支援は過去のこと」という気持ちでいたように思います。でもこれを読ませていただいて、まだまだ私たちにはしなければならないことがあるのではないかと思います。このレポートはロータリーの編集長ウェン・ホアンさんが自ら戦地ウクライナに赴いて記事にされたものです。このタイミングで掲載されたという事は私たち一人ひとりに向けた「ウクライナを忘れないでください」というメッセージなのではないかとも思います。再度ウクライナ支援の機運が高まることを期待したいと思います。

今日は帰られましたら是非このレポートをご一読いただければと思います。

## ○「東日本大震災以降の土湯温泉の取り組み」 渡邊 和裕 会員

本日は、例会の貴重なお時間にスピーチの時間を与えて頂き誠にありがとうございます。元来、終わったことは忘れる主義なので、12年前のことも思い出さないようにしていたのですが、年のせいか語り伝えることも重要なんだと思うようになっていた所に今回のお話を頂き、東日本大震災について話す事といたしました。思い出したくない方がいらしたらご容赦下さい。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、土湯温泉は県内の温泉地としては一番の被害を受けてしまいました。収容規模の大きい観山荘と向瀧は、建物が被災し、危険物扱いとして半壊認定され、営業存続が不可能となり、その他中規模旅館の富士屋旅館も廃業、辰巳屋山荘里の湯が長期休業となるなど、昭和29年の土湯大火以降から築き上げてきた温泉地が一瞬の内に崩れかけてしまいました。

これら被災した建物が野ざらし状態になっていることから、景観的にも温泉地のイメージが損なわれる結果となり、さらに追い打ちをかけるように東京

電力福島第一原子力発電所事故により放射能汚染が広がり、県内外からの観光客も激減し、福島県内全産業が未曾有の被害を受けてしまいました。土湯温泉は福島市内でも放射線量は低い方でありましたが、風評被害的なものを払拭するには、長い年月を有するものと思われました。これら一連の出来事は、ハード面の損壊だけでなく、まちづくりと地域経済の活性化にも大きな影響を及ぼしました。震災発生後、6月までの予約はほぼすべてキャンセルとなり、日帰り観光客も激減の一途をたどって、一般のお土産店には来客が皆無といった状態が続きました。

震災以降、二次避難先として浪江町、南相馬市から950名の方々を8月頃まで受け入れし、旅館経営を維持してきましたが、避難者の仮設住宅等への移動が進むにつれて、これからの旅館業経営の維持が困難と悲観した旅館3軒が廃業してしまいました。平成21年9月までは土湯温泉としての旅館数は25軒（土湯温泉街19軒、土湯峠6軒）でありましたが、平成23年2月現在で3旅館の閉館により22軒、震災後3旅館が廃業・長期休業し、さらに避難者仮設住宅移動後に3旅館が廃業となり、現在16軒となりました。

町の復興再生と観光活発化を迫られる状態となっており、平成23年10月2日に土湯温泉町復興再生協議会が設立されました。復興再生協議会においては、土湯温泉が抱える課題と強みについて議論され、「土湯温泉の強みを常に進化させ、地域住民の一人ひとりが地域で何ができるか、将来何を残すかを考えて行動することが課題解決の第一歩となる」と考えるに至りました。

震災から1年6ヶ月が経過しても、震災被害や風評被害による旅館の休廃業状態は解消できないままでありましたが、幸い、福島市の宿泊補助事業や原子力事故賠償金により、宿泊施設の新たな廃業を発生させることはなくなりました。

一方、環境省の補助金採択5,500万円によるバイナリー発電計画のための温泉資源調査を開始したり、国土交通省の補助金採択1,690万円により小水力発電計画とまちづくりの合同事業を企画したりと再生可能エネルギー事業による新たなまちづくりは着々と進められました。温泉資源調査の結果、16号源泉において発電が可能と判断され、400kW級の設備が最も経済性が良いという診断になったことから、10月には発電の事業主体となる「株式会社 元気アップつちゆ」が設立され、バイナリー、小水力両発電事業とも、平成27年の事業化を目指し活動を開催することとなりました。



復興再生協議会のもう一つの柱は町並みの再生でした。震災から1年9ヶ月が経過し、福島県中小企業等グループ施設等復旧整備補助事業の採択を受けながら、湯遊つちゆ温泉協同組合では17号源泉の掘削および地上設備の復旧がなされ、休業していた旅館の内からも多くの旅館が復旧しました。11月1日には危険物扱いとなっていた向瀧旅館も客室数51室、収容人数300名として営業が再開されました。その他の廃業旅館は、環境省の震災被害建物解体補助事業により旧富士屋旅館と旧つたや旅館、25年来の懸案であった元土湯峠ドライブインも合わせて解体撤去がされましたが、建物の中の動産の処理費は自己負担となることからNPO法人土湯温泉観光町づくり協議会が712万円を負担することで解決しました。観山荘については、平成25年に入ってから解体される事となり、解体後は福島市と共に国土交通省の都市再生整備補助事業（総事業費21億円）を活用し、公共性の高い施設へ整備していく提案が福島市よりなされ、平成26年から5年程度かけて整備する計画となりました。自主廃業となった旧天景園、旧土湯温泉ホテル、旧東海温泉についても土湯内外の企業に買収され、多くは除染作業員の宿舎として活用されました。

都市再生整備事業では、旧中之湯跡地と旧富士屋跡地、旧下之湯跡地を整備し公衆浴場新中之湯へ、旧いまずや旅館を活用して町おこしセンター『湯楽座』へ、旧観山荘跡地を使って観光交流センター『湯愛舞台』へ、平成30年度内に整備する事で決定しました。

限られた時間の関係で経過のみを羅列しましたが、ここまでの取り組みが出来た裏には多くの人々の協力があったればこそなのは言わずもがなです。一例をあげると、林会員のおかげで、東京中央新ロータリークラブの会員でもある銀座ミツバチプロジェクトの白坂理事長や田中副理事長には毎年土湯温泉に来ていただいて交流を深めていただいています。また、白坂理事長が会長を務める銀座社交飲食業の皆様には震災のあった年の5月の連休の時に銀座からバスで駆けつけ避難民の人々にハニーハイボールを1000杯配って頂きました。場違いかもしれませんが、この場を借りて感謝申し上げますと共に災害の時こそ、その人の生き方が問われると感じた事を申し添えスピーチと致します。ご清聴有難うございました。

## 会員スピーチ

### ○「大震災から12年…あの日を振り返って」 伊藤 弘子 会員

今まで、大震災の事をあまり話すことはしてきませんでしたが、今回会員スピーチの依頼を受けた事、そして大震災の一週間前に生まれた孫が、今年の春中学生になるので振り返ってみることにしました。

12年前の3月11日、私は南東北病院にてペット検診の日でした。そして次の土日はカメカメホームの春のリフォームフェアを開催する日でした。12万部のチラシ折りも済ませて、準備は万端でした。

その日、いろいろとイベントの準備があるので午後3時までは事務所に戻ってくださいと、スタッフから言われておりました。私は、郡山の南東北病院の検診が終わり、高速道路を福島に向かって走っておりました。3時まで戻るのはギリギリになると思いながら走っていると、私の携帯電話に緊急地震速報のアラームが鳴りました。時間がもったいないとは思いましたが、とりあえず松川パーキングに入り、入り口に止まっていたトラックの横に



停車しました。その途端、グラグラと今まで経験したことの無い強い揺れが来ました。私は、しばらくの間固まっていたのですが、隣のトラックが、ゴムまりのように弾んで、私の車に近づいてくるので、怖くなり、車を移動しました。移動しながら時計を見て「約束の3時になってしまう…」と焦った私はそのまま本線に戻りました。揺れが続く中、無我夢中で西インターまで走りました。途中、何度も会社に電話しましたがすでに繋がりませんでした。インターを降りて、115号は、信号が停電で作動せず大渋滞でした。コジマ電気の前を通った時、店舗のガラスがめちゃくちゃに割れ落ちているのが見えました。「カメカメホームはどうなっているんだろう…」とやっとの思いでカメカメホームに到着し、すでに停電・断水している2階の事務所に上がっていきこうとしたら、スタッフから「見ないほうがいいですよ」と言われました。「何を言ってるの？」と思いながら、2階に駆け上がり、事務所の扉を開けたら、イベントは中止だと悟りました。机がひっくり返り散乱して、机の上のノーパソコン10台が全滅していました。私は、停電で薄暗くなった展示場に、スタッフを集めて「明日・明後日の2日間のイベントは中止です…」と告げました。みんな下を向いていました。

そして、なかなか電話が繋がらない状況の中、大事な家族やご両親の安否をすぐに確認してくるようにと、全員を帰しました。

次の日からは、お客さまから住宅のSOSの連絡がたくさん入りました。協力業者と一緒に班を作って、屋根にシートを掛けたり、倒れたボイラーを起こしたりと動きました。それにプラスの原発事故。原発事故の情報は、非常に遅く、全くと言っていいほど入ってきませんでした。ただ、双葉町や富岡町の知り合いの人たちは、避難所になった学校で一夜を明かし、地震が起きた次の日の朝7時に一斉に学校放送のチャイムが鳴り、「出来るだけ西のほうに全員移動を開始するように」と指示が出たそうです。

地震から2~3日後、わたり病院の向かい側のお客様のお宅で、外壁が崩れ落ちた現場の応急措置をしていた時、わたり病院の玄関の入口に、白い防護服を着た人たちが沢山いて、「この光景は何だろう」と不思議な気持ちで見ていることが、目に焼き付いて忘れられません。双葉町や富岡町の知り合いは、もうこの時点で富山県や石川県に避難をしていました。その後福島市・伊達市にも少しずつ情報が入って来て、若い社員やスタッフは、急いで小さな子供を連れて避難しました。私の生まれたての孫も、ファミリーで静岡県まで避難しました。目に見えない放射能については、データが全くなくて、この数字が危ない数値なのかさえ、わからない状態でした。このため、福島に住んでいるこれから出産するわけでもない私には、危機管理はありませんでした。ただ、地震による停電や断水で、生活が止まってしまっているのを感じました。

今は、スイッチを入れれば電気が付き、水道をひねれば安全な水が出るのが当たり前ですが、停電がやっと解消して、みんなで万歳したこと、断水が長く続いた後、やっと水が出てみんなで喜んだことを経験して、「今の生活は、当たり前ではないんだ」と今回の振り返りで反省をしました。

あれから12年が経ち、あの時の苦労も想いも、すっかり色あせていました。「未曾有の大震災」、「多くの命を飲み込んだ津波」、「今まだ解決しない原発事故」、年月が経つにつれて、記憶からうすれ、やがて忘れられていくけれど…。

実際に津波が押し寄せ、目の前で、家や大切な人が飲み込まれていく怖い体験をされた人や、住み慣れた家や地域の仲間をバラバラにした原発事故の被害者には及びませんが、ただ私の短い一生の中に、偶然に体験した大震災を教訓にして、今は、子供や孫たちに出来る範囲で語り継いでいきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

## 誕生祝い 親睦委員会 河野 忠 委員長

1月生まれ： 国分 秀夫 会員

3月生まれ： 八島 隆志 会員， 齋藤 高裕 会員

4月生まれ： 佐久間 功 会員， 黒羽 好夫 会員， 宍戸 隆司 会員， 赤間 浩一 会員，  
齋藤 弘之 会員， 植松 みち子 会員



## 幹事報告 「4月の行事」 宍戸 隆司 幹事

### (1) 福島南RC関係について

- ・ 4月9日(日) 花野山児童支援事業 (愛育園児童 14名引率職員 4名)
- ・ 4月12日(水) 福島駅古関裕而氏モニュメント野球殿堂入りロゴ差し替えセレモニー
- ・ 同日 パスト会長会
- ・ 4月19日(水) 第32回家族観桜夜間例会  
\* 久しぶりの家族を招待しての夜間例会となります。

### (2) 地区・分区行事について

- ・ 4月7日(金) 第一分区会長幹事会
- ・ 4月8日~9日 RYLA研修会  
\* 渡邊正義会長，伊藤弘子会員，菊地和宏会員の会社から参加をいただきます
- ・ 4月15日(土) 二本松あだたらRC30周年記念式典
- ・ 4月22日(土) ロータリークラブあれこれ相談会
- ・ 4月23日(日) 県北第一分区親善ゴルフ大会 (ホスト：福島南RC)

以上